

# デカルトにおける区別の議論

## — 『哲学原理』における三種の区別—

今井 悠介

### 1. はじめに

本稿の目的は、『哲学原理』におけるデカルトの区別の議論の構造を解釈し、その特質を明らかにすることである。デカルトの区別の議論とは、デカルト哲学の存在論における、いわば基礎的カテゴリーと言ってよい、実体 (substantia)、属性 (attributum)、様態 (modus) をそれぞれ区別するための三種の区別について論じる議論である。三種の区別とは、それぞれ、実在的区別<sup>1</sup> (distinctio realis)、様態的区別 (distinctio modalis)、理性的区別 (distinctio rationis) であるが、実在的区別が主に実体と実体との間の区別であり、様態的区別が実体と様態との間の区別、そして理性的区別が実体と属性との間の区別を示している<sup>2</sup>。本稿でわれわれがとりわけ注意を払い取り扱うのは、もっとも記述が纏まって整理されている『哲学原理』の第1部第60節～62節における三種の区別に関する議論である。しかし、この「区別」という概念自体は、主著である『省察』の最終的な目標の一つが心身の実在的区別の論証であったということからも窺える通り、デカルト哲学全体においても極めて重要なものであり、「反論と答弁」や、様々な書簡においてなど、他のテキストにおいてもしばしばこの「区別」に関連する議論が行われているものである。この区別の議論は、例えば『省察』では物体 (= 身体) と精神の実在的区別の論証という、書物全体の目的の一つとなり、また物体の実在証明の論証過程で論証に必要な議論として用いられるなど、様々な役割を果たすが、区別そのものがそれ自体独立に主題的に扱われるのは、『省察』の様々な主題に関する応酬である「反論と答弁」を除けば『哲学原理』が初めてである。そのためか、表立ってこの三種の区別の議論とデカルトの哲学全体の関係を論じる研究は少ないが、デカルト哲学の方法論上の根幹にこの区別に関する議論があるとする解釈もある<sup>3</sup>。われわれは、こうした解釈と同じ路線を進むものであり、区別の議論は、それが表立って現れないところでもデカルトの思考を導いているものだと考える。

ところで、『哲学原理』におけるデカルトの三種の区別の議論の重要性は、特に日本における研究においては、従来あまり論じられてこなかった<sup>4</sup>。というのも、通常、区別というと、心身の実在的区別の問題がとりわけ論じられ、本稿で特に扱う『哲学原理』における実在的区別、様態的区別、理性的区別、の三種が合わせて考察され、そのものとして独自に研究されることが少なかったからである。たとえば、先ほど述べたように、『省察』において、この三種の区別が主題的に取り扱われることはなく、心身の実在的区別の論証などに関わる限りでしかこうした区別について言及されることはない。しかし、主題的に考察されることはなくとも、『省察』において、後に『哲学原理』で展開されたような区別に関する議論を背景に論証が進められていることは明らかであるように思われるので、少なくとも、『哲学原理』の区別の議論と、『省察』における区別の概念がどう関連しているのかを解きほぐす必要はあるだろう<sup>5</sup>。

また、ここがわれわれの強調したい点なのであるが、特定の区別単独を見る限りでは、このデカルトの区別の議論はスコラの区別論の、若干の改定を加えた単なる引き写しに過ぎないもののように思われてしまう<sup>6</sup>。しかし、われわれは、区別の議論は（心身の）実在的区別など単独の区別だけではなく、この三種の区別が合わせて考察され、その関係が見て取られるべきであり、そうするならば、デカルトのこの区別の議論とスコラの従来の区別論との差異が見て取れ、また、デカルト哲学においてこの区別の議論が占める枢要な位置が明らかになると考える。本稿におけるわれわれの目的は、デカルトの『哲学原理』における三種の区別を合わせて考察することで、それぞれの区別の構造と区別間の連関を明らかにしてその基本的特徴を描き出し、デカルト哲学において区別の議論が果たしている役割の一端を明らかにすることである。また、ジルソンの解釈を足掛かりとし、スコラの区別論とデカルトの区別論の差異を研究する端緒として、区別論の中での実在に関する扱いの差異を明らかにしたい。

さて、本稿の構成を述べよう。まず、第2節において、『哲学原理』における三種の区別の議論を紹介する。続いて、第3節において、区別の議論の解釈を試み、その意義を検討する。最後に、第4節において、ジルソンの誤解を足掛かりとして、スコラの区別論と比較した場合の、デカルトの区別論の特徴を明らかにし、前節において提出した解釈の意義を提示したい。

## 2. 『哲学原理』における三種の区別

われわれが扱う区別の議論は『哲学原理』におけるものであり、同様の三種の区別の纏まった議論が『省察』の中にあるわけではない。ここから、次のような解釈の余地が生じる。すなわち、『哲学原理』はスコラ哲学の教科書にならって書かれた書物であり、それゆえスコラ哲学の概念にいくらか歩みよっており、よりデカルト独自のスタイルで書かれた『省察』に直接対応する箇所がない区別の議論は、そのようなスコラ哲学への歩み寄りを示す部分であり、したがってデカルト哲学の中でも例外的な議論とみなすべきではないか、という解釈である<sup>7</sup>。この解釈に対しては、たしかに三種の区別の纏まった記述は『省察』に見られないが、ほぼ同内容の区別に関する記述が『省察』においても見られる、ということ指摘すれば十分であろう<sup>8</sup>。そして、その『省察』における区別に関わる議論を解明するためにも、より豊富な記述がある『哲学原理』における区別の議論を検討する必要があるだろう。

それでは、実際に『哲学原理』の区別の議論を見ていこう。まずは、実在的区別 (*distinctio realis*) に関する規定である。「実在的区別というのは本来、二つまたはそれ以上の実体の間にのみ存するものである。そしてわれわれが、これら実体を互いに実在的に区別されたものであると知覚する (*percipimus*) ためには、一方を他方なしに明晰判明に (*clare et distincte*) 知覚することができるだけで十分なのである。」(AT VIII, 28) ここで説明されているように、実在的区別は実体と実体との間の区別である。この区別を知覚するためには、一方を他方なしに明晰判明に知覚できれば十分であるとされる。その例として、物的実体、すなわち延長実体と思惟する実体が挙げられており、物的実体の部分間の区別、および、思惟実体間の区別、思惟実体と物的実体との間の区別が例示される。

ついで、様態的区別 (*distinctio modalis*) の規定を見よう。「様態的区別には 2 通りある。すなわちその一つは、本来の意味での様態と、これを様態として持つ実体との間の区別であり、もう一つは、同一実体の二つの様態の間の区別である。前の方の区別が知られるのは、われわれが実体を、実体とは異なるといっている様態なしにも明晰に知覚しうるが、しかし、逆にこの様態を、実体なしには知覚しえない、ということからである。たとえば、形や運動が、これらの内在している物的実体から、また肯定や記憶が精神から、様態的に区別される場合がそうである。後の方の区別が知られるのは、われわれが一方の様態を他方の様態なしに、またその逆にも、認識しうるが、しかしどちらの様態をも、それらが内在す

る同一の実体なしには認識しえない、ということからである。たとえば、石が運動しており、かつ四角であるとすると、その石の四角い形は運動なしに知解され、また逆に、その石の運動は四角い形なしに知解されうるが、しかし、この運動もこの形も、石という実体なしには知解されることができないように。」(AT VIII, 29) 様態的区別は、ここでは二つ述べられている。一つ目のものは実体と様態との間の区別であり、その区別は、実体はその様態なしに明晰に知覚しうるが、逆に様態は、それがその様態であるところの実体なしには明晰に知解しえない、ということに基づく。二つ目の区別として、同じ実体の様態と様態との間の区別が述べられているが、この場合は、どちらの様態も互いなしに知覚しうるが、しかし、そのどちらの様態もその実体なしには明晰に知覚しえない、というものである。この様態的区別の概念の中心になっているのは一つ目のものであり、二つ目のものは、おそらく、実在的区別との混同を避けるために補足されたものであろう。というのも、様態間を比べる限りでは、それぞれを知覚するために互いを必要とせず、その点では実在的区別と同様であり、その結果その二つは様態ではなく実体とみなされる可能性もあるからである。これを避けるために、それら様態が共に、それなしには様態が知覚されないようなその様態の実体の知覚が必要であることを述べ、一つ目の区別の内容へと帰着させるのである。

最後に、理性的区別に関する規定を見ていこう。「理性的区別は、実体と、その実体における、これなくしては当の実体を知解しえないような何かある属性との間にある区別である。もしくは、ある同一の実体における二つのそのような属性の間にある区別である。そしてこの区別が認識されるのは、もし実体からそのような属性を排除するなら、その実体について明晰判明な観念を形成することができなくなるということ、あるいは、そのような二つの属性のうち一方を他方から切り離すなら、どちらの属性についてもその観念を明晰に知覚することができなくなる、ということからである。たとえば、どのような実体でも、持続することをやめると、存在することをもやめるのであるから、実体がその持続から区別されるのはただ理性の上でのことにすぎない。」(AT VIII, 30) ここで説明されているように、理性的区別は実体とその属性との間の区別である。また、同じ実体の属性と属性との間の区別でもあると説明される。この区別は、実体から属性を排除するなら、その実体を明晰判明に知覚できないということ、また、二つの属性の一方を他方から切り離すなら、どちらの属性についても明晰に知覚できなくなる、ということに基づく。

これらの三種の区別によって、実体、属性、様態間を区別することができる。本節ではそれぞれの区別の内容について概観したが、それを受けて次節では、それぞれの区別の連関と、これら三種の区別を合わせて考察した場合にどのような解釈が与えられるのかを見ていきたい。

### 3. 関係的解釈—とり得る依存関係の組み合わせとしての、区別の議論

われわれの解釈では、これら三種の区別は、明晰判明な観念を形成する上での二つの項の間の依存関係の、取りうる可能な組み合わせ、つまり、次のような単純な論理的関係に帰着する。すなわち、(1) 双方が互いに独立しているもの（相互独立）、(2) 一方が他方に依存し、もう一方は他方に依存していないもの（一方的依存）、(3) 互いに依存し合っているもの（相互依存）、この三つである。それぞれ、(1) 実在的区別、(2) 様態的区別、(3) 理性的区別、に対応する。

詳しく説明しよう。実在的区別は、双方ともに、一方の明晰判明な知解のために、他方を必要としないこと、つまり、一方の明晰判明な知解が、他方の明晰判明な知解に依存しないこと、前提としないこと、を意味している。例えば、デカルト哲学において、精神的実体は、物的実体なしにも明晰判明に知解することが可能であり、また逆もそうである。これに対し、様態的区別は、一方の認識には他方の明晰判明な知解が必要であり前提とされていることを示し、しかし逆はそうではないということから、一方の他方への（認識における）依存関係を表している。例えば、デカルト哲学において、延長という概念は運動や、特定の形なしにも明晰判明に知解しうるが、形や運動の概念は延長の概念なしには明晰判明に知解しえない。最後に、理性的区別は、双方ともに、一方の明晰判明な知解のためには他方の明晰判明な知解が必要であること、つまり、双方ともに互いの明晰判明な知解に依存し、明晰判明な知解を前提しているということを示している。例えば、実体と持続と存在は、一つでも欠けたものを思惟しえず、一つを明晰判明に知解するためには、他の明晰判明な知解が必要なものであろう。

このように三種の区別が二つの項の間の依存関係という単純な論理的関係に帰着するという解釈は、次の事実によって補強されるだろう。すなわち、様態的区別においては、様態間の区別と、実体と様態との間の区別という二つの区別が考えられていたのに対し、理性的区別においては、属性間の区別であっても、実体と属性との間の区別と異なった区別が考えられていない、という事実である。そ

の理由は、われわれが考えるに、様態と様態間の区別においては、一方を他方なしにも知解しうるので、その二つの項の間の依存関係のみを考えた場合、実体と実体との区別とみなされる可能性があった。だから、様態の様態たる所以である、実体への依存性に依拠して、実在的区別との差異を論じる必要があったのである。すなわち、二つの項の関係だけでは（実在的区別か様態的区別かの）区別ができないので、三つ目の項を持ち出す必要があったのである。また、互いに他方なしにも知解しうるという区別（二つ目の区別。様態間の区別）と、一方なしには他方が知解しえないという区別（一つ目の区別。実体と様態との間の区別）とでは論理的関係が異なるため、これらを二つの区別としたのであろう。これに対して、理性的区別においては、属性間の区別も、実体と属性との間の区別も、ともに、双方ともに他方の明晰判明な知解を必要とするという関係が変わらないため、一見すると実体と様態との区別と様態間の区別とを分けた時と同様、実体と属性との区別と属性間の区別も分けるのが自然なのではないかと思われるのだが、ここでは区別が設けられていないのである。このことは、デカルトがこの三種の区別の議論において、以上のような論理的関係のみを考えていたということの一つの証拠であるとわれわれは考える。

ところで、三種の区別が以上のように単純な論理的関係に帰着するという解釈は、取り立てて珍しいものではなく、先行研究においても同種の指摘がなされている<sup>9</sup>。先行研究においては、二つの項の間の関係を、包摂、排除、あるいは分離可能性/不可能性といった概念で捉えている<sup>10</sup>。用語の違いはあれ、項の間の関係によって三つの区別がそれぞれ形成されている、という発想は同じである、というのがわれわれの解釈である。従来の解釈はこの諸区別の構造の分析に留まっているが、われわれが主張したいのは、この関係的解釈の意義である。このように解釈することによって、個々の区別同士を比較したのでは分からない、デカルトの区別論とスコラの区別論との構造的な対比が可能になる。そして、われわれが主張したいのは、この単純な論理的関係からなる区別の議論をデカルトが構築したことによって、スコラの区別論から構造的な転換が起こった、ということである。詳しくは次節で述べるが、このように三種の区別がそれだけに尽くされる単純な論理的関係の組から形成されることにより、区別の議論が、その存在論的身分がすでに確定したもの同士の関係を見定めるものではなく、何も身分が確定していない諸項の関係から、ある種の存在論的秩序を形成する議論へと変わるのである。重要なのは、あらかじめそれと分かっている実体、属性、様態の関係がど

のようなものであるかを論じるのではなく、むしろ、上述したような関係のもとに見出されるものこそが実体、属性、様態と呼ばれるべきであるのだ、ということへの変化である。そして、この実体、属性、様態をこのように形成するものこそ、上述した関係の違いによって形成される諸区別なのである。

#### 4. ジルソンの誤解から窺える、デカルトの区別論の特徴

最後に、このデカルトによる区別論の含意を探るために、デカルトの実在的区別に関するジルソンの誤解を辿ることで、デカルトの区別論の特徴を描き出し、われわれが区別論の关系的解釈ということは何を主張したいかを明らかにしよう。

小林が指摘するように、ジルソンはデカルトの心身の実在的区別を誤解し、批判した<sup>11</sup>。その批判は、(1) 心身の実在的区別の論証は、われわれが精神と身体の判明な観念を持つことに加えて、精神が実在することの論証と、身体が実在することの論証を前提にしており、したがって、(2) 心身の実在的区別の論証の前には、物体が実在することが論証されていなければならない。しかし、(3) 物体の実在証明のためには意志に反して感覚が与えられるという経験が必要であり、したがって心身の結合を前提にしており、そこから、心身の実在的区別の論証は心身の結合を前提にする、という結論を引き出す。これをジルソンはデカルトのパラドックスと呼ぶ。デカルトは、論証の順序として、心身の実在的区別、物体(身体)の実在証明の順に進むのだが、心身の実在的区別の論証の前提であるべき物体の実在証明が実在的区別の論証の後に証明されており、したがって悪循環である、というのがジルソンの批判である。

この批判に対し、ゲルーは、デカルトにおいては実在的区別の「実在的 (realis)」には実在する (existere) という意味はまったくなく、として、デカルトにおけるこの「realis」という言葉の意味の誤解から、ジルソンは、物体の実在証明が心身の実在的区別に先立たねばならないという誤った解釈をした、と主張する<sup>12</sup>。

このジルソンに対する再批判はまったく正当であり、デカルトの区別の議論において、ジルソンの (1) の主張は正しくない。すなわち、デカルトの実在的区別においては、精神と身体の判明な観念を、双方とも他方なしに、持つことができれば十分なのであり、物体と精神の実在証明は必要ではない。また、デカルトにおける「realis」という語に、「実在する (現実に存在する existere)」という含意がないというのも正しい。しかし、われわれはジルソンの実在的区別に関する誤解

を、*realis* という語の意味についての単なる誤解というよりも、むしろ、伝統的な実在的区別の概念の理解に忠実だった故の、誤解と批判であったと解釈する。すなわち、この誤解を、ジルソンの単なる個人的なデカルトのテキストの誤読と考えるのではなく、スコラ的な実在的区別と、デカルト的な実在的区別の違いを背景としたものなのではないかと考えるのである。

スコラ的な実在的区別として、ここではスアレスとの比較に絞って論を進めたい<sup>13</sup>。少なくともスアレスにおける実在的区別は、ジルソンの (1) の主張を満たす必要があった。というのも、スアレスにおける実在的区別は、実際に存在する事物の間の区別であるからであり、思考上の事物同士の区別ではないからである<sup>14</sup>。そのような思考の上での (概念的な区別のみに基づくような) 区別は、スアレスにおいては、おそらく理性的区別とされる<sup>15</sup>。スアレスにおいては、実在的に区別されるためには、実在的に区別される二つのものが、独立に実在していることが必要であった。そのため、概念上の区別に加えて、それぞれのものが独立に実在しうることを論証する必要があったのである<sup>16</sup>。これを心身の実在的区別に関して考えてみると、心身の実在的区別のためには、心身が概念的に区別されることに加えて、精神が実在し、そしてそれと独立に身体が実在することを論証する必要があることになる。このような実在的区別の考えを背景として、ジルソンの、(1) の主張が出てきたと思われる<sup>17</sup>。

このようにして考えてみると、仮にスアレスの実在的区別の概念に足場を置いた場合、デカルトの実在的区別の論証は、精神と身体がそれぞれ他方なしに明晰判明に知覚されうるといふことの論証 (これが概念上の区別) だけで行われていて、不十分であり、精神と身体とが相互に独立に実在しうることを論証する必要があり、この論証が行われていない以上、不完全な証明であると言える<sup>18</sup>。これを展開し、精神と身体が独立に実在することの論証として、身体の実在証明が不可欠だと考えると、ジルソンの批判とまったく同様のものになる。このように、伝統的な実在的区別の概念を念頭に置いている読者にとっておそらくデカルトの実在的区別の概念は異質なものであった。ジルソンの誤解は、デカルトが実在的区別の概念を変えてしまったということに基づいている。

スコラ的な区別の発想を、例を交えて考えてみよう。日常的な素朴な考え方に従えば、この机と椅子、といったような、ものともとの区別がわれわれが目にするもっとも基本となる大きな区別であって、それと対比されるのが、例えば宵の明星、明の明星といった、実際には同じものだが、われわれの思考の上では別

のものになりうるような、そういった小さい区別である。さらには、そのような、ものとしては同じで、われわれの思考の中だけで区別されるようなものの中でも、あるものの存在と持続といったような、われわれが恣意的につくったような区別ではなく、事物の側に根拠があるように思われるもの、事物の側からそのように区別させるようわれわれに働きかけているように思われるような区別がある。そして、そうした思考の上でのみ存在する区別と、実際にあるものとの間の区別の、中間の区別もあるように思われる。例えば、ある物体の形と運動は、同じ一つのものに関してあるもので、ものともものように区別されるものではない。しかし、われわれの思考の上で単に区別しているだけのものでもなく、実際に区別されるものとして思考の外にも存在しているように思われる。このようにして、ものとももの間の区別として実在的区別が、思考の上だけでの区別として理性的区別が（そして理性的区別の中でも、より恣意的なものと、ある種の必然性を持ったものとに分けられる）、それらの中間的なものとして様態的区別が考えられる。これがストアレスをはじめとした伝統的な思考の進め方であり、極めて自然な考え方であろう。この考え方に従うならば、心身の区別はどう考えられるかを考えてみよう。精神と身体は、人間という一つのものとして存在している。したがって、それが実在的に区別されると主張したいなら、精神と身体とが概念的に別個のものであり、思考の上で区別されると言うだけでは不十分であり、それぞれが別々に、どちらかが離れたとしても存在しうるということを論証する必要がある。仮にどちらかが滅びた時、他方のものも滅びるなら、両者は実在的に区別されるのではないことになる。

これに対して、デカルトの区別の考え方は事情が異なる。デカルトにおいては、二つのものが、互いに他方なしに明晰判明に知覚されうるなら、両者は実在的に区別されることになる。なぜ別々に明晰判明に知覚されうるだけで十分かと言うと、独立に明晰判明に知覚されうるならそれは神によって創造可能であるという、神の力能に拠った別の論証から導かれるのだが、少なくとも、区別の議論において、それぞれが独立に実在すること、の論証は必要なく、独立に明晰判明に知覚されるだけで十分なのである。これは大きな違いである。というのも、そうすると、前述した、実際のものとももの間の区別、思考の中だけの区別、といった区別の間の違いが消失するからである。一面では、すべてが明晰判明な知覚のみ則っており、そうした区別が実際に存在するものにおいて成り立っているのか、ということが問題にならないため、すべてが思考の中だけでの区別、ということ

になる。他方、すべての区別が明晰判明な知覚に基づいており、デカルト哲学において、明晰判明な知覚は（例えばキメラのように精神が仮構するような）主観的な恣意性を離れて、ある種の強制を伴う真理性と結び付き、事物の側（*de parte rei*）に根拠がある、ということの意味する<sup>19</sup>、さらに、そうした明晰判明な知覚をその通りに創造するという神の力能の議論を介せば、思考の中の区別ということを超え、すべてが事物の側を根拠として成り立つ区別であると言えることができる。その点において、デカルトにおいて、ストアスにおいては存在していた、実在的区別、様態的区別、理性的区別の間の大・中・小、という区別の大きさの差は存在せず、明晰判明な知覚に基づくという共通性を拠り所に、すべての区別はフラットなのである<sup>20</sup>。諸区別の違いは、ただ、一方を他方なしに明晰判明に知覚しうるかどうか、ということの可能なヴァリエーションの、論理的関係の違いのみに基づいている。ストアスにはあった、大、中、小といった区別の大きさ、そしてそれに伴う実在性の含意の差異は消失しているのである。すべては等しく存在し、かつ等しく実在を含意しない。これがデカルトの区別論において起こった変化である。ストアスとデカルトの区別論は一見するとほとんど同様のもの、あるいはストアスの縮小・単純化としてデカルトの区別論を捉えることができるように思われるが、実際にはこのように構造的に大きな変化が生じているのである<sup>21</sup>。

前述したジルソンの批判は、デカルトの特異性をあぶり出している。デカルト哲学においては、ものが実在するかが確定される前に区別の議論がなされ、ついでその区別されたものが実在するかが問題になる。ここから、区別がものの画定の役割を果たしており、実質的に存在論のカテゴリーを形成しているのは区別の議論である、という解釈の可能性が生じる。ここで言うものの画定とは、様々な項（例えば、熱さ、運動、意志の働き、延長するもの、など）を思い浮かべる時、その項単体を見た限りではどういったものか、その身分が判明としないが、項同士の（認識上の）依存関係を検討することによって、その項がもの（事物、実体）であるのか、そのものに依存する様態であるのか、ものに欠かせない本質であるのか、初めに判明になり、どの項がそもそも真にものと言えるものか、そしてものと言えるものが何を資格としてもとされるのか、分かる事態を指している。その際、日常の感覚によって個物とされているものの身分が再度改めて検討されることになる<sup>22</sup>。その一つの帰結が、心身の実在的区別である。日常的な感覚では、人間は一つのものとしてしかみなされない。これに対しデカルトは、精神と

身体とがそれぞれ全く独立に明晰判明に知覚されるということを根拠にして、人間は権利上二つの事物からなるものである、と主張する。そもそも一つのものに思われる、というところから出発するのではなく、その思考上の依存関係から改めてものとは何かを設定し直すデカルトの区別論においてこの心身の実在的区別は可能になったことである。こうしたデカルトの考えに対し、あるものの実在がその本質よりも先に分かるということは、ものともとの境界画定が、諸本質同士の区別（あるいは、何がそもそも何の本質であるかということが）がされる前にすでになされているということを意味する。というのも、あるものが実在するためには、そのものがあるものであるということが、その詳細な内容や本質規定がなされている必要はないが、すでに確定していなければならず、この「あるものである」ということがすでにももの境界を形成してしまっているからである。こうしたものの境界は、詳細な検討がなされる以前の先入見とすら言うだろう。他方で、デカルトの枠組みにおいては、実在が先に確定していない状態で諸々の項が認識されるため、先に実在を認識するとする枠組みに伴う、ものともとの意識することのない暗黙の区別が混入することなく、まずもってそれらの項が何であり、すなわち、何が実体であり、何が様態であり、何が本質であるかが検討される。そして、それを決めるのが、諸々の項同士の関係に関する議論、すなわち区別の議論である。区別の議論の役割が、その存在論的身分がすでに確定したものの同士の関係が、どのような種類の区別であるかを見定めるものから、そもそも何が区別されるべきであり、何がものを分けるのか、というものともとの区別の形成へと変わっているのである。というのも、前述した三種の区別の協働によって、実体・属性・様態を軸としたある種の存在論的秩序が形成されるからである。デカルトにおいて、区別の議論は、すでに暗黙に区別されたものの区別の性質を議論するものでなく、何と何とが区別されるべきであるのかをまずもって決定する議論へと変化しているのである。言わば、この三種の区別の議論は、あらかじめ分類された諸存在者を比較するメジャーなのではなく、諸存在者の構成規則なのである。このように見直すことによって、デカルトが区別の議論によって言わば一種の存在論を形成していることが分かるだろう<sup>23</sup>。

## 5. 結びにかえて

以上、『哲学原理』における区別の議論の概観と、その三種の区別の論理的関係

(二つの項の依存関係の組み合わせ)に観点を絞った解釈、および、そこから窺えるデカルトの区別の議論の特質について検討した。残された課題は、この構造変化が何に由来するのか、すなわち、スコラ的な区別論からの、区別論の中の細かな議論の変化に由来するのか、それとも認識論・知識論が存在論的議論に先行するというデカルト哲学の性格に由来するのか、あるいは明晰判明な知覚との関係における神の力能の議論など、他の議論系の変化に由来するのか、という問いである。この問いや、スアレスの区別論との詳細な比較を含めた、デカルトの区別論の体系的な検討は、他日の課題としたい。

---

\* 本稿は科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。

<sup>1</sup> 「*distinctio realis*」の訳語として、本稿は「実在的区別」を採用するが、それは従来多く用いられている訳語との連続性を保つと共に、スコラにおける区別論との差異を見て取りやすくするためである。他に、「事象的区別」という訳語を採ることもでき、デカルトの区別論、ないしデカルトの「*realis*」概念を念頭に置いた場合、この訳語の方がより相応しいとさえ言えるだろう。というのも、本文でも述べるように、デカルトの *distinctio realis* には、その区別、ないし区別される当のものが実在する (*existere*) ことは含意されていないからであり(そしてこれは、区別という概念なしの「*realis*」概念でも同様である)、「実在的」という訳語を用いると、その点で誤解を与えてしまう可能性があるからである。それに対して、「事象的」という訳語は、この「実在」というニュアンスを与えないという点で都合が良い。ところが、スアレスにおいては事情が異なる。スアレスにおいては、「実在的区別」という訳語のニュアンスの通り、当の区別、および区別されるものが実在することを含意するのである。「事象的区別」という訳語を採用したのでは、このスアレスの実在的区別にあった「実在」の含意が薄れてしまうことになる。言ってみれば、「実在的区別」という訳語が表す印象はスアレスの区別論に相応しいものであり、他方「事象的区別」という訳語が表す印象はデカルトの区別論に相応しいものであり、デカルトにおいて、「実在的」でなく「事象的」という訳語を選択するように促されるという事態が、既に区別論の地殻変動を明瞭に示していると言える。

<sup>2</sup> 後に詳述するように、実際はもう少し複雑である。ここではエッセンスのみを示す。

<sup>3</sup> 例えば、浪岡(1996)など。

<sup>4</sup> 例外として、浪岡(1996)がある。浪岡は区別の議論をデカルトの形而上学の展開の不可欠の条件と述べ、デカルト形而上学の「核心部を解く鍵」とであるとみなす。cf. 浪岡(1996, 31) われわれもこの見解に同意するが、浪岡が初期との断絶と展開・変化を示すものとして区別の議論を解釈する一方で、われわれはむしろ区別の議論を初期の『規則論』のモチーフの残滓と考えている。

<sup>5</sup> われわれは、『省察』から『哲学原理』にかけて、若干の理論的發展(より適切には「反論と答弁」での批判を受けての、様態的区別に関する補完)はあるものの、三種の区別に関する基本的な発想は変わらないと考える。これについては、また稿を改めたい。

<sup>6</sup> 例えば、Wells(1965)はデカルトの様態的区別の議論を詳細に解釈する上でスアレスの区別の議論と比較し、スアレスの区別論と対比した上でのデカルトの区別の議論の位置付けを行っている。この議論に学ぶところは大きい。Wellsは、デカルトとスアレスの間に存する構造的な差異に無頓着であるように思われる。われわれが本稿で提出する関係的解釈と呼ぶものは、こうしたスコラの区別論の枠組みからデカルトの区別論を捉えようとするものではなく、そうした先立つ議論を一旦忘れ、その構造だけに着目しようとするものである。

<sup>7</sup> おそらく、『哲学原理』における類、種、種差に関する議論はこのような「歩み寄り」タイプのものであると言える。cf. AT VIII, 27-8. 『省察』や他の著作にも同様の議論は登場せず、『哲

学原理』においても一つの節で登場するのみであるからである。これに対し区別の議論は、これとは事情が異なる。

<sup>8</sup> 例えば、「第六省察」の心身の実在的区別と、その直後の議論を参照。cf. AT VII, 78. まず身体と精神の実在的区別について、『哲学原理』の区別の議論と同じ徴表（一方を他方なしに明晰判明に知解しうる）について論じられたあとに論じられ、ついで感覺する能力、想像する能力などの思惟する能力とその実体である知解する実体との様態的区別が、これも『哲学原理』の区別の議論と同じ徴表（一方は他方なしに明晰判明に知解しうるが、もう一方は他方なしには明晰判明に知解しえない）を用いつつ論じられる。

<sup>9</sup> 例えば、Wells (1965)、吉野 (1983)、浪岡 (1996)、Skirry (2004)。

<sup>10</sup> いずれもデカルトのテキストにおいて根拠があるものである。特に、分離可能性、不可能性については、スアレスにおそらく由来する概念的系譜を持っている。また、浪岡もこの概念について述べている。cf. 浪岡 (1996, 41)

<sup>11</sup> cf. 小林 (1995, 278-81), 「実在的区別は、区別された事物の実在性 (la réalité) を含意する」(Gilson 1967, 309)。ジルソンのパラドックスとそれに対する批判に関しては坂井 (1980) 参照。

<sup>12</sup> cf. Gueroult (1953, II, 68)

<sup>13</sup> ここでスアレスを比較対象とするのは、区別の議論に関して、おそらくデカルトがスアレスの議論を実際に読み、影響を受けたと思われるからである。cf. Gilson (1913, 87)。しかし、スアレスを比較対象とすることには問題もある。本稿では紙幅の都合で詳述できないが、単純な論理的関係（分離可能性/不可能性）から三つの区別が形成されるという発想そのものはおそらくスアレスに由来するからである。スアレスには、デカルトの発想を先取りしている点と、旧来の発想を保存している点とが混在しており、デカルトと綺麗に対照できるわけではない。

<sup>14</sup> *Disputationes Metaphysicae*, Disp. VII, Sec. II, 9. 実在的区別の徴表は、二つのものが結合を離れても同時に、実際に (simul & actu)、保存されうること、とされる。また、もう一つの徴表として、实在 (existentia) に関する相互分離可能性、すなわち、一方が他方なしに、それ自身によって直接 (per se immediate) 保存されうること、そしてその逆、つまり他方ももう一方なしに保存されうること、が挙げられている。これらは、少なくとも、明晰判明な観念の上での分離可能性のみを問題とするデカルト以上の、実在性への含みを持っていると言える。

<sup>15</sup> 思考の中における区別といっても、精神が仮構したような区別 (distinctio rationis ratiocinantis) と、事物の側に基礎がある区別 (distinctio rationis ratiocinatae) とは区別される。cf. *Disputationes Metaphysicae*, Disp. VII, Sec. I, 4. しかし、どちらも、精神の中のみある区別、という点で、実在的区別からは区別されている。

<sup>16</sup> 注 13 を参照。実在的区別の徴表は、实在に関する相互分離可能性であるので、実在的区別を主張するためには、区別される二つのものが、互いに他方なしに（独立に）実在しうることを論証する必要がある。概念的に二つのものが区別されるというだけでは不十分である。

<sup>17</sup> このようなデカルトの実在的区別に対する誤解はジルソンだけのものではない。スアレスとデカルトの実在的区別の概念の親近性を論じる（この議論は非常に示唆に富んでおり重要である）田口も、实在論証が必要というジルソンのような強い主張はないものの、デカルトの実在的区別の概念に関して、それに近い誤解をしている。田口は「デカルトの実在的区別の根拠は二つの実体とその一方が他方にまつことなく存在することであるけれども」と述べるが、デカルトの実在的区別の根拠は、一方が他方なしにも明晰判明な観念を形成しうること、にある。そして、存在の側で考えたとしても、デカルトの実在的区別は、一方が他方にまつことなく存在すること、ではなく、存在しうること、に根拠を持っている。些細な違いではあるが、重要な違いである。田口の表現は、やはり、二つのものが実在している状態で、分離可能であるかどうかを問題にしているように思われる。しかし、デカルトの実在的区別は、明晰判明な観念の上で、二つのものが分離可能かどうかだけが問題になっている。cf. 田口 (1995, 80)

<sup>18</sup> 「第一反論」において、反論者も同様の批判をしている。そこでは、デカルトの主張する心身の実在的区別がスコトゥスの形相的区別にあたるのではないか、という指摘がなされるが、

それはすなわち、デカルトの論証では実在的区別の論証までには至らず、単なる概念上の区別にすぎないのではないか、という批判を暗に含んでいる。cf. AT VII, 100.

<sup>19</sup> この事物の側に根拠があるということで、精神に外的な物体の実在を前提し、それを忠実に引き写している、といったような含意はない。

<sup>20</sup> その証拠として、スアレスの区別論には頻出する、より大きい、より小さい、中間、といった表現は、デカルトの区別の議論においてまったく登場しない。ちなみにこの大・中・小という語は特に説明なくスアレスの区別論において用いられるが、区別される項と項とをより隔てるものが、より大きい区別とされているように思われる。例えば、思考の上だけで区別され、実際のものとしては同一である二つの項の間の区別より、一つ一つが独立に実在する二つの項の間の区別の方がより大きい区別とされる。デカルトの区別論においては、このような区別の大きさの表現はない。

<sup>21</sup> 議論の立て方や構成の違いを含めた、スアレスの区別論との詳細な比較は、紙幅の都合上扱えなかった。おそらく発想の源泉は同じであり、一見するとほとんど同じであると思えるほど両者の区別論はよく似ている。

<sup>22</sup> その結果、デカルトにおいてもそれはそれ以前とは異なった様相を呈する。そもそもデカルトにおいて精神以外に個物を考える余地があるのか、ということが問題になるほどである。スコラでは個物とみなされていたものと、デカルトの実体の輪郭が一致するかは、定かではない。二つの事物からなると考えられる人間の例のように、一致しないものも容易に考えられよう。

<sup>23</sup> デカルトにおいては種類の概念が半ば廃棄されるが、それは、この実体・属性・様態の三つ組みが認識上の依存関係の単純な組み合わせによって決まり、そしてそれだけで存在論的秩序を形成するのに十分だったからではないか。単純化された存在論としてのデカルトの存在論のカテゴリーは、このようにしてその存在論的基盤が変わったことにより、類、種、種差、偶有性、特有性などの、それらが生み出された時には必要とされ、長年用いられてきたような、そうした諸概念をもはや必要としないので、用いないのではないだろうか。

#### [参考文献]

\* デカルトのテキストからの引用は全てアダン・タンヌリ版全集 *Oeuvres de Descartes, publiés par C. Adam et P. Tannery, Nouvelle présentation, Vrin, 1964-1974/1996.*により、その際 AT と略記し、巻数と当該箇所のパージ数を併記して示す。

\* スアレスのテキストからの引用は全集 *Opera Omnia, éd. Vivès, 1856-1877, 20 vol.*により、著作名に討論の番号と節番号を添えて指示する。

小林道夫. 1995. 『デカルト哲学の体系-自然学・形而上学・道徳論』, 勁草書房.

坂井昭宏. 1980. 「デカルトの二元論-心身分離と心身結合の同時的存立について」, 『千葉大学教養学部研究報告 A』, 千葉大学教養部, 第 13 号: 141-72.

田口啓子. 1995. 「ANIMA と CORPUS の実在的区別について-スアレスからデカルトへ-」, 『中世哲学研究』, 京大中世哲学研究会, 第 14 号: 80-7.

浪岡淳. 1996. 「デカルトの区別論について」, 『東北哲学会年報』, 東北哲学会, 第 12 号: 29-42.

吉野譲二. 1983. 「区別と実体-デカルトにおける物的実体の数多性について-」, 『思索』, 東北大学哲学研究会, 第 16 号: 58-78.

Gilson, Étienne. 1913. *Index scolastico-cartésien*, F. Alcan.

—. 1967. [Descartes], *Discours de la Méthode, texte et commentaire*, 4e édition, J. Vrin.

Gueroult, Martial. 1953. *Descartes selon l'ordre des raisons*, Aubier-Montaigne, 2vols.

Skirry, Justin. 2004. "Descartes's Conceptual Distinction and its Ontological Import," *Journal of the History of Philosophy*, Johns Hopkins University Press, 42, 2: 121-44.

Wells, Norman J. 1965. "Descartes And The Modal Distinction," *The Modern Schoolman*, 43 Novem: 1-22.